J-20 型ステルス戦闘機試作 2 号機の試験飛行

漢和防務評論 20120624

KDR 香港平可夫特電：5 月 16 日、J-20 の 2 機目の試作機（機番号 2002）が試験飛行を行った。2002 はこの 3 月に出現した。最初の試作機（機番号 2001）に比べると、ピトー管の位置が変わり、F-35 のような内装式給油装置を装備しているようだがそれを証明するには更に多くの証拠写真が必要だ。そのほか、2 機目の試作機は機体全体の構造は同じであり、エンジンの排気口から見ると同じエンジンを使用しているように見える。すなわち国産の WS-10 型エンジンの改良型で、スラストベクターではない。試験飛行を加速するためには、通常 3 機の試作機で同時に試験飛行を行う。3 機目の試作機にはレーダーを装備し、武器、アビオニクス、レーダーの試験を行う可能性がある。

2 機目の試作機が出現したことは、J-20 が単純な試験機ではなく、戦闘機として就役させる計画があることを示している。各国のエアショーにおいて、東欧、ロシア及びヨーロッパの航空機の専門家は何度も J-20 の設計について討論したが、J-20 の外形構造が第 4 世代戦闘機（ロシアでは第 5 世代）の範疇に属することを誰も認めなかった。彼らの一致した意見は、「J-20 は、ステルス性を犠牲にして機動性を優先追求した機体である。その根源は中国の”国土防空”への伝統的思想に基づいており、同時にエンジン技術は第 5 世代戦闘機のレベルには達していない」ということだ。このことは、J-20 の完成機は、最初の試作機と大差がないことを意味する。そうだとすると J-20 は、依然誰もが強い印象を受ける中国が独自に開発した多用途戦闘機であり、今後中国が国際標準の第 5 世代戦闘機を開発する際の基礎になる。

また注意すべきことは、J-20 の開発速度である。2 番目の試作機と最初の試作機の試験飛行の時間差は僅かに 1.4 年であり、ロシアの T-50 型ステルス戦闘機の最初の試作機と 2 番目の試作機との試作機完成時期の差は 1.3 年であった。したがって T-50 も J-20 も 2 番目の試作機の試験飛行の時期が接近していたのである。これらのことから、この 2 種類の航空機の正式就役時期は接近するであろう。当然 T-50 は、主な領域で国際的な第 5 世代戦闘機の設計要求を満たしている。ロシアの空軍司令 ZELIN 大将は T-50 の就役時期を 2014 年であると何度も表明しているが、試験飛行業務の基本的な流れから見て不可能だ。試験飛行のためもっと多くの時間が必要だ。

成都航空機会社の過去の経験に照らせば、2 番目の J-20 試作機が工場での試験飛行段階に入った後、最初の J-20 試作機は、閻良（空軍の飛行試験部隊）に送

られ空軍基地での試験飛行がおこなわれる。この段階で” 真の試験飛行” が開始される。前の段階、すなわち成都では 62 回の試験飛行がおこなわれた。これはロシアの T-50 の試験飛行回数を超えている。全てが順調でも試験飛行に 7-10 年を要する。米国の YF-22 の最初の試作機は、1990 年 9 月 29 日に初飛行し、2001 年に基本的な試験飛行が終了した。

ベトナムは日本から潜水艦救難技術を習得

漢和防務評論 20120624

KDR 簡潔ニュース：

ベトナム国防部長ホンガンチン大將は、2011 年 10 月 23 日から 28 日の間東京を訪問した。防衛省に近い消息筋によると、同部長は呉の潜水艦基地を訪問し海上自衛隊の現役潜水艦を詳細に視察した。ベトナムはすでにロシアから 3M-14E 型潜水艦発射対地攻撃巡航ミサイル及び 3M-54E 型対艦ミサイルを装備した 6 艘の KILO636MV 型潜水艦を購入している。

ベトナムは、インドに対し潜水艦要員の訓練、後方支援及び補給の支援を求めているが、技術の主たる支援者は当然ロシアである。同消息筋によると、ベトナム国防部は、海上自衛隊の潜水艦救難技術に強い興味を示しており、日本に訓練支援を求めているという。

日本は初めてベトナムと防衛協力メモランダムに署名し、双方は” 戦略的パートナー” の関係を確立した。

以上